

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520811

研究課題名(和文)スーサ博物館のエラムおよびエリュマイス資料研究

研究課題名(英文)Studies on Elymaean material at the sites and museums of Susa etc.

研究代表者

春田 晴郎(Haruta, Seiro)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：90266354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：エリュマイス貨幣のうち読みが確定していない小規格貨の銘文をいくつか検討した。ヤズド所蔵の貨幣カタログNo.287については、mnybn'n hwrsynという仮の読みを与え、Kbnshkyr-wrwd王の即位前の名および称号ではないかと推察した。マスジェデ・ソレイマーン出土スーサ博物館所蔵の四柱神に対する解釈については、女神像とされてきた像に口髭を確認し男神であることを明らかにした。国内所蔵新エラム語銘文入り金属器についても従来の研究で知られていなかった表記例を指摘した。

研究成果の概要(英文)：New reading of some legends of the Elymaean coins, and new interpretation of the four images on each side of a capital found at Masjed-e Soleiman, and some remarks on the Neo-Elamite inscriptions of metalwares kept in Japan.

研究分野：古代イラン史

キーワード：エリュマイス 新エラム スーサ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、1990年に「紀元後のエリュマイス王国」という論稿を『史林』第73巻第3号に発表し、それまで日本語で単独の論考がまったく存在しなかった同王国について、相対年代や貨幣銘文の言語などを明らかにした。

その後も、イランへの現地調査を何度か行ない、2006年には第13回ヘレニズム～イスラーム研究会において「バルデ・ネシャーンデ出土柱頭側面の浮彫像」という題名で口頭発表を行ない、2007年には Seiro HARUTA, "Elymaean and Parthian Inscriptions from Khuzestan", in: *Proceedings of the 5th Conference of the Societas Iranologica Europaea*, Vol.I, Milano, pp.471-478 (2003年の学会発表を元にして), などでエリュマイス王国についての研究を進めてきた。

また、新エラム時代についても、2010年から2011年初めにかけて、日本の MIHO MUSEUM、平山郁夫シルクロード美術館、古代オリエント博物館で金属器銘文調査を行ない、その成果の一部は、平山郁夫シルクロード美術館・古代オリエント博物館編『古代のペルシア』山川出版社、2010年、中で公にしている。新エラム時代について、粘土板文書や石碑・浮彫碑文資料以外の文字資料を題材に発表したのは、日本では初めてである。古代ペルシア帝国勃興直前の、歴史的には重要な時代にあたる。

このように、日本でほとんど取り組む研究者のいない新エラム、全く他に研究者のいないエリュマイス王国の資料について、研究代表者は今まで研究を進めてきた。

平成23年度から5年間、国土館大学21世紀アジア学部前川和也教授(所属等は申請当時)を代表者とする基盤研究(A)(海外)「イラン国立博物館所蔵粘土板文書の調査・研究」に、本研究代表者は、研究分担者として加わり、2011年5月、8月とイラン国テヘランの考古博物館において楔形文字文書(粘土板およびレンガ)の研究(撮影等)に、他の研究分担者と共に取り掛かっている。

このような研究を取り巻く状況の進展のもと、本研究課題「スーサ博物館のエラムおよびエリュマイス資料研究」と応募するのに適した時期になった、と判断した。

2. 研究の目的

(1)イラン・イスラーム共和国スーサ博物館に所蔵される紀元前1千年紀前半の新エラム王国時代の資料および紀元前2世紀から紀元後3世紀にかけて栄えたエリュマイス王国の資料を研究調査する。また、現状ではまったく国際的に知られることのない日本に所蔵される新エラム時代の銘文付き資料にもついても研究し、発表する。

そして、世界においても未だまとまった概説書すら存在しないエリュマイス王国に関

しては、資料を網羅した研究を発表し、成果を還元する。新エラム時代の資料についても、在日本の資料と併せて、国際的に発表し、また日本においても新エラム史について成果を一般に広める。

(2)当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義として、以下を挙げることができる。

エリュマイス王国資料に関しては、上にも述べたように世界的にも専論が少なく、また包括的に王国史を扱う本格的な研究は未だ存在しない。未解読銘文の解読など新たな成果を加えていくことは、独創的で重要な成果である。

新エラム時代エラムについても、新出資料の紹介・発表は、やはり研究の少ないエラム関係の研究にとって大きく資するところとなるであろう。

これらの対象について、概説レベルでもほとんど触れられることのない日本で成果を一般に出すことは、古代オリエント研究全体のレベルを向上させることにもなる。

3. 研究の方法

(1)外国出張によって現地資料等の実見調査を行なう。2012年末のイラン出張ではスーサ博物館ほかその周辺のエラム、エリュマイス関連遺跡・遺物等を実見調査した。2013/14年未年始のイラン出張では、ヤズドの博物館(エリュマイス貨幣のコレクションを有する)等で実見調査を行なった。2014/15年未年始のイラン出張では、再びスーサ博物館および近隣の遺跡、またブーシェフル州およびファールス州の遺跡(エラム史で非常に重要なマルヤーン遺跡を含む)での実見調査を行なった。

(2)国内出張によって、日本に所蔵される新エラム語銘文が記される金属器の調査を行なった。

(3)関連文献を収集し、資料分析に利用した。

4. 研究成果

2012年末および2014/15年未年始のイラン出張において、スーサ博物館や周辺遺跡等で関連遺物などの実見調査を行ない、また2013/14年未年始にはヤズドの博物館等での実見調査を行なった。また、国内出張によって、国内所蔵のエラム、エリュマイス関連の調査も行なった。文献の収集も含めた上で、本研究の成果のうち主要なものは、以下の3点にまとめられる。

(1)エリュマイス貨幣 KM287 銘文の読み

紀元後(パルティア時代後期)のエリュマイス王国貨幣の銘文については、すでに春田晴郎「紀元後のエリュマイス王国」『史林』73-3(1990)、127-148において詳述した。

この文献は海外では残念ながら知られていないが、現在でも基本的には改めるべきところはない。その後、Wrwd 1 世の直前と思われる貨幣にエリュマイス文字で Wrwd とのみ記した大規格貨（銅テトラドラクマ貨）がいくつかオークションなどを通じて知られてきた。しかし、これは銘文の読みそのものについては問題が生じない。また、従来 Phraates / Pr 't として一括されてきた貨幣について、これを二群に分ける Amini（下記参照）の新説が提唱され、検討に値するが、これも銘文そのものの読みには関係しない。

ここで検討するのはヤズドの Kazemeini Museum(2013/14の年末年始に訪問実見調査)に所蔵されているエリュマイス貨幣の中で、Amin Amini による前イスラーム時代貨幣のカタログ *Iranian Coins. Pre-Islamic period. The coins of Kazemeini Museum, Yazd, 2010* (ペルシア語)の p.91 に収録されている No.287 の小規格貨(銅ドラクマ貨;以下 KM287 と呼ぶ)の銘文についてである。銘文を除けば、Wrwd / Wrwd II の Type3 あるいは Kbnškyr-wrwd / Kwmškyr-wrwd の Type1 (この両者は銘文以外には区別できない)のパーティア文字銘文貨幣と同じであり、ただパーティア文字の銘文のみがまったく異なっている。Amini は、銘文については読みを記さず、不明の王のものとしている。これに対して、Hassan Pakzadian, *Elymais Coins*, Tehran, 2007 (ペルシア語), p.118 では、ayrywbyrzn mlykw と転写され(転写法は一般的なものに改めた)「Aryobarzin? 王」と読んでいる。しかし、この読みは、Amini カタログ写真の字形からは受け入れられない。

Wrwd / Wrwd II および Kbnškyr-wrwd / Kwmškyr-wrwd の小規格貨パーティア文字銘文は 6~8 時方向から左回りに記されるのが普通なので、それにしたがって転写すると以下のように、とりあえず読むことができる：
mnybn 'n hwsyn

残念ながら、これ以上の考察を確度をもって進めることはできない。しかし、一つの可能性として、Kbnškyr-wrwd / Kwmškyr-wrwd の即位前の名(および称号?)が記されているのではないかと考えることはできる。先にも述べたように、Wrwd / Wrwd II の Type3 と Kbnškyr-wrwd / Kwmškyr-wrwd の Type1 はデザインがまったく同じであり、両王を同一人物とみなすことさえ可能である。Wrwd / Wrwd II の貨幣が Type1、Type2 に続いて Type3 と変遷しているなら、これはその直後を示すことになり、上記のような推定を行なうことは可能であろう。

なお、Kbnškyr-wrwd / Kwmškyr-wrwd の小規格貨パーティア文字銘文において、Kwmškyr-wrwd なのか Knmškyr-wrwd なのか従来の写真からはあまりはっきりしなかったのが、Amini カタログの p.88, No.269 の写真からは Kwmškyr-wrwd であることが確認で

きる。

エリュマイス貨幣の銘文の読みは、それ自体では細かいことであるが、それはエリュマイス王国後期の王の相対順を決定することに繋がり、そしてそれはエリュマイス王国美術の年代を決定することに密接に関わる。ヘレニズム美術が土着美術の中に溶解していく様子が長期間に渡って観測できるのがエリュマイス美術であり、その意味でも、こうした基礎作業はきわめて重要である。

(2) マスジェデ・ソレイマーン出土柱頭の四神像

スーサ博物館所蔵マスジェデ・ソレイマーン出土柱頭の四神像については、マスジェデ・ソレイマーンを発掘したフランス隊による報告書 R. Ghirshman, *Terrasses sacrées de Bard-è Néchandeh et Masjid-i Solaiman*, 2 Vols, Paris, 1976, の Vol.1 Texte, pp.111f. において簡単に述べられているが、それ以降ほとんど研究がされていない。

2012 年末および 2014 年末にスーサ博物館で実見調査を行ない、新たな知見をいくつか得た(同時に 2014 年末にはマスジェデ・ソレイマーン遺跡も訪問)。その中で最大のものは以下である。フランス隊報告書では柱頭の 4 面に描かれる神像について、1 面を女神、残りの 3 面を男神としている。しかし、詳細に実見して見ると、「女神」とされている像には口髭があり、胸その他の特徴も女神のものとはいえず、男神であることが判明したことである。柱頭の 4 面を飾る像として、従来の解釈(1 面女神、3 面男神)ではいくらか不自然な点があったが、それは解消される。

今後は同時代の各地の神像と比較していくことが課題となり、その比較対象は西の最初期仏像も含まれる。

(3) 国内に所蔵される新エラム語銘文を有する金属器について

新エラム語銘文を有する金属器が、いくつが日本の博物館美術館に所蔵されている。

これらの銘文については、W. Henkelman, *Persians, Medes and Elamites: acculturation in the Neo-Elamite period*, in: *Continuity of Empire(?): Assyria, Media, Persia*, ed. by G.B. Lanfranchi, M. Roaf & R. Rollinger, Padova, 181-231, Plates 9-15 を参考に読んでいくことができるが、一部は Henkelman 論文にない例も存在する。

たとえば、平山郁夫シルクロード美術館ほか『栄光のペルシア』pp.54-55 に載せられている平山郁夫シルクロード美術館所蔵「ライオン装飾杯」(NR103057) は口縁部内側に新エラム語銘文を持っている。これは Henkelman 論文で Kal. 3 というタイプに属する銘文であるが、1 箇所相違がある。それは「サマティの王」を表わす「サマティ」の部分で、Henkelman の挙げる例では、

sa-ma-tir_e-ra であるが、この銘文では sa₁₅-ma-tir_e-ra (sa₁₅=šá)となっている。現地イラン語(?)を新エラム語に転写する際の揺れとして貴重な例となる。

新エラム期、とくにハハーマニシュ朝(アカイメネス朝)統一直前の新エラムについては、近年新発見が相次ぎ研究が非常に活発である。日本所蔵の資料も重要な貢献をなすであろうことは疑いない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

春田 晴郎、ローマ人と関連する可能性のあるイラン、ウズベキスタンの遺構、ヘレニズム～イスラーム考古学研究, 査読無, 21, 2014, 108-112

Seiro HARUTA, "Aramaic, Parthian and Middle Persian", *The Oxford Handbook of Ancient Iran*, 査読無, 2013, 779-794

春田 晴郎、パルティア語銘文のある個人蔵銀製鉢, ヘレニズム～イスラーム考古学研究, 査読無, 20, 2013, 99-105

春田 晴郎、MIHO MUSEUM 所蔵鶏を銜える山猫形リュトンの銘文, ヘレニズム～イスラーム考古学研究, 査読無, 19, 2012, 86-94

[学会発表](計6件)

Seiro Haruta, Historical Importance of the Izeh Plain: Viewed from Later Periods, *Ancient Iran: New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies*, 2014, 12, 6-7, 京都大学ユーラシア文化研究センター(京都府京都市)

春田 晴郎、ローマ人と関連する可能性のあるイラン、ウズベキスタンの遺構, 第21回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会, 2014, 7, 5-6, 金沢大学角間校舎(石川県金沢市)

春田 晴郎、古代ペルシア文字の類別: 音節文字? 単音文字?, 第57回シュメール研究会, 2014, 6, 21-22, 立教大学池袋キャンパス(東京都豊島区)

春田 晴郎、パルティア語銘文のある個人蔵銀製鉢, 第20回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会, 2013, 7, 6-7, 奈良県立橿原考古学研究所(奈良県橿原市)

春田 晴郎、パルティア史研究から分かること, 2012年度史学研究会大会, 2012, 11, 2, 京都大学吉田キャンパス(京都府京都市)

春田 晴郎、日本に所蔵される伝キヤルマーカーキツラ出土金属器の新エラム語銘文について, 第54回シュメール研究会, 2012, 5, 26-27, 早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

春田 晴郎 (HARUTA Seiro)

東海大学・文学部・教授

研究者番号: 90266354